

[3] 生徒の実態

指導を展開するにあたり、様々な方法での実態把握に努めた。各実態調査の結果は、指導前と指導後と比較するための基礎資料とした。また、調査結果から個人および学部全体の傾向や留意点を探り指導に生かしていくこととした。

(1) 集団編成

	担任		生徒		主 な 障 害	略記号及び教育歴	
	男	女	男	女			
1年	2		7		・自閉症 ・ダウン症 ・てんかん ・感覚統合不全	本校小学部～	L男 G男
	1	1	7	0		他校より入学	M男 A男 N男 H男 S男
2年	2		9		・プラダウィリー症候群 ・自閉症 ・てんかん ・水頭症	本校小学部～	C男 F男 R子
	0	2	7	2		他校より入学	Z男 O男 B男 I男 E男 M子
3年	2		5		・ダウン症候群 ・過緊張亢進症 ・プラダウィリー症候群 ・てんかん	本校小学部～	T男 Y子
	1	1	3	2		他校より入学	K男 U男 H子

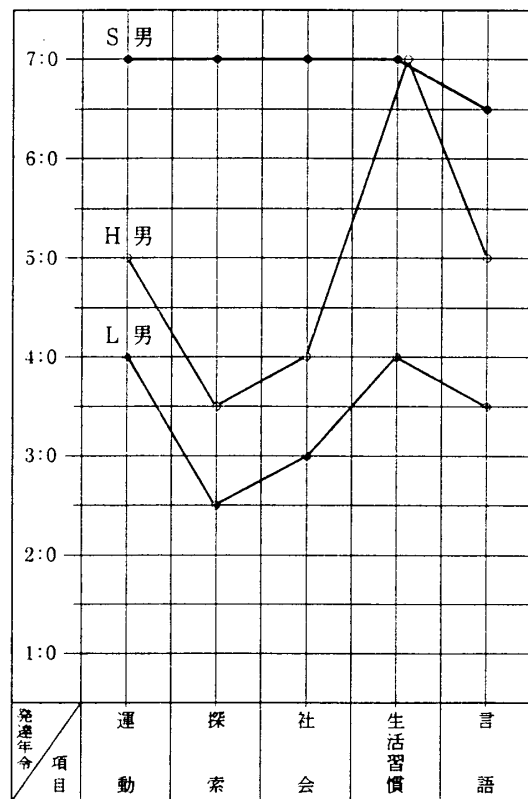
中学部の今年度の基礎（学級）集団の編成は、上の表に示すとおりである。学年進行・複数担任制を採用しているが、体育、音楽、作業学習、生活単元学習の一部は学部合同で、課題別学習は学級を解いた習熟度別編成とし、多様な集団を設定し様々な関わりが持てるよう配慮した。

(2) 津守式乳幼児発達検査（H5.5実施）

〔目的〕 発達段階、領域間の層化現象等から、その背景にある心理・行動の特性を探り、暦年齢と合わせて発達課題や指導の手立てを得ると同時に、グループ編成等の参考や根拠にする。

〔考察〕 右図に示すように、全体的に生活習慣、運動面に比べて、探索、社会、言語面が低い傾向にある。探索が低いのは幼い頃から様々な経験が不足していることの影響が考えられる。特に社会・言語面での低さについては、コミュニケーションに視点をあてた取り組みの成果が期待される。

右の図のS男、H男、L男に代表されるように、発達年齢に大きな開きがある。また、H男のように層化現象を大きく示す生徒も多い。このような点を考慮しながら、それぞれの段階の生徒には、それに対応した個々の指導が必要である。



津守四季発達検査 (1993.1)

図2 津守式乳幼児発達検査

(3) WISC-R 知能検査 (H 5. 5 実施)

〔目的〕生徒の知能や言語性や動作性の個人内差を把握し、指導の手立てや方法を探る。

〔考察〕全IQの結果は、IQ 40以下でWISC-Rでは測定できない生徒は6名、IQ 40~50は9名、IQ 50~70は6名と重度から軽度まで差がある。

言語性IQと動作性IQの個人内差を見ると、右の表のように、ふたつの間に大きなアンバランスのみられない生徒が12名である。また、15以上のIQの差がある生徒が3名おり、いずれも言語性より動作性のIQが優位で、3名中2名は自閉症の生徒である。

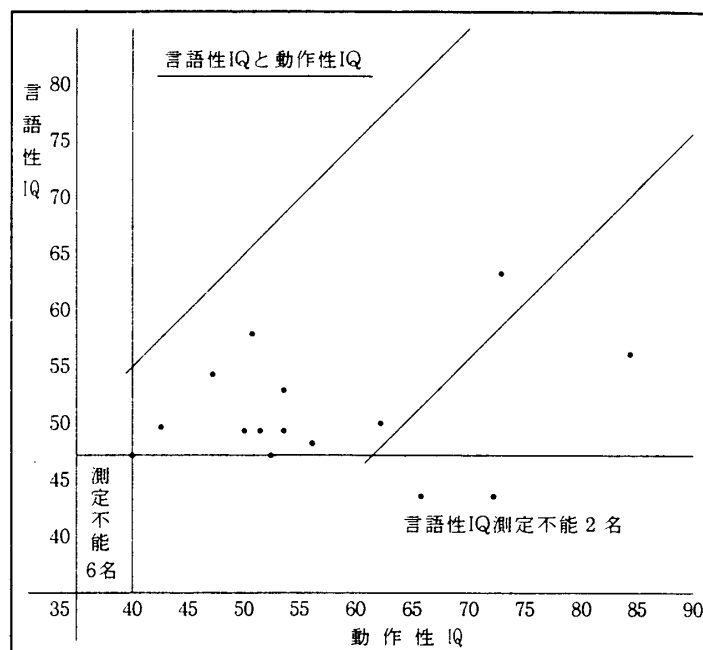


図3 言語性IQと動作性IQの個人内差

以上のことから、大部分の生徒は、聴覚一音声、視覚一運動の両面から多面的にことばの働きかけをしていくことが重要と考えられる。言語性IQより動作性IQの方が優位な生徒3名については、聴覚より視覚優位であることを考慮したコミュニケーション手段や環境を考えていく必要があると思われる。また、測定困難な6名については、よりきめ細かな指導の手立てを考えていく必要がある。

(4) S-M 社会生活能力検査 (H 5. 5 実施)

〔目的〕具体的な生活における知的な働きや技能の程度を知り、生徒の社会的な生活能力を把握する。

〔考察〕一人ひとりの社会生活年齢 (SA) については、124頁の資料に示すとおりで、2歳8か月~5歳未満が5名、5歳~8歳未満が12名、8歳~10歳が4名である。そして、全般的に、図3のT男やK男のように身近自立や作業に比べ、意志交換や集団参加の領域で落ち込みがみられる。

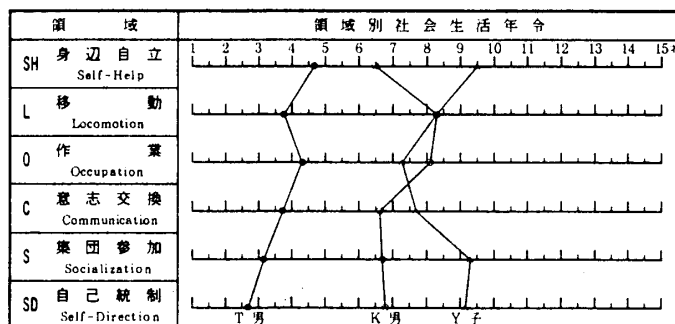


図4 領域別社会生活年齢 (SA)

このような実態から、意志交換や集団参加の力をつけることを意図した学習の展開や多様なグループ編成に努めたい。特に中学部の段階では、社会化を目指した取り組みが必要だと考える。

(5) コミュニケーション・サンプル (H 5. 5 実施)

〔目的〕生活の流れにそった自然な場面を選び、生徒のコミュニケーション行動を記録し、機能、文脈、形態について分析・評価し、指導に役立てる。(注4)

表2 コミュニケーション・サンプルの評価例

Z 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報提供や情報請求が多い。 ● 先生・生徒どちらにもよく話しかける。 ● 表出言語あり。
O 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 絶えず周囲の誰かに話しかけ、その場の状況を説明しようとする。 ● 先生・生徒どちらにもよく話し、特に先生の注意を引こうとすることが多い。 ● 表出言語あり。
B 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 発する言葉は、「ねえ、先生」「やったぜ」など1～2語文で、注意喚起や感情表現が多い。 ● 慣れた先生や友達には、自分から話しかけることができる。 ● 表出言語でやりとりができるが、言葉が不明瞭で、聞き取りにくい。
I 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報提供や情報請求が多い。 ● 先生・友達どちらともよく話す。 ● 表出言語あり。
C 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 目の前の出来事に対して素直に感想を言ったり説明したりするが、情報提供する力は弱い。 ● 先生・友達どちらにもよく話しかける。 ● 表出言語あり。
F 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 要求・注意喚起・拒否が多い。 ● 先生との関わりが主である。 ● 要求は、直接、動作により示すことが多い。

〔考察〕 中学部の生徒は、右の表にも示すとおり、全員が表出言語を持ち、先生や友だちと会話ができる。しかし、発することばが1～2語文で注意喚起や感情表現が多い生徒から、情報提供や情報請求が次々といける生徒まで、実態は様々である。また、説明をしても内容が乏しい場合が多く、より豊かなコミュニケーションの力を培いたい。

(6) 基礎学力（国語・数学）（H5.5実施）

〔目的〕 国語・数学における基礎学力を把握し、課題別学習のグループ編成、個人目標の設定をする。

〔考察〕 下の表のように、実態をまとめ、これをもとに、課題別学習のグループを編成した。AグループとCグループの間にはかなりの学力差があり、段階に応じた学習内容が選定される必要がある。

表3 基礎学力（国語・数学）の実態例

名前	国語	数学
Z 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 漢字の習得率 1年：9割程度、2年：7割程度 3年：2割程度 ● 簡単な文章なら内容の理解ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 計算 3位数+3位数、1位数-1位数 1位数×1位数 ができる。 ● 簡単な文章題でも殆どできない。
F 男	<ul style="list-style-type: none"> ● 50音はほぼ読み（ひろい読み）書きできる。 ● 漢字 1年生程度の視写はできるが、一人では書けない。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 80位までの数唱ができる。一人で書けるのは8位まで。 ● お金の種類の区別・数えること、時計は定着していない。
L 男	<ul style="list-style-type: none"> ● ひらがなは全部読める。 ● 身近な漢字なら読める字もある。 ● なぞり書き、ワープロができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 30までの数唱ができる。 ● 10までの数字の判別ができる。 ● 1対1対応は具体物を使ってできる。
B 男	<ul style="list-style-type: none"> ● ひらがなは読めない。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 13位までの数唱ができる。 ● 数字の判別はできない。 ● 1対1対応はできない。
C 男	<ul style="list-style-type: none"> ● ひらがなは殆ど読めない。 ● “お” は一人で書ける。 ● お話を何回か読んでもらおうと覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 17位までの数唱ができる。 ● 5位までの数字の判別ができる。 ● 1対1対応はできない。

(7) 段階別教育内容表のⅣ段階到達度評価（H5.5実施）

〔目的〕 中学部は段階別教育内容表のⅣ段階の習得を目標にしている。その各分野、各項目の内容がどの程度身につけているかを評価し、Ⅳ段階までの習得率を〔図5〕のようなクライモグラフにまとめた。我々がコミュニケーションに視点をあてて取り組んでいる研究も、このグラフの各項目を広げる力となり、その広がり社会的自立へつながるものである。

〔考察〕 全体的に広がり小さく、身辺処理の確立を目指しながら将来の自己実現の場を見極めていく必要のある生徒が4名いる。また右図のG男のように、Ⅳ段階のラインにはほぼ達しつつあり表現化の力を蓄えつつ社会化の広がり期待したい生徒が14名と多い。そして、グラフの各項目が大きな広がりを見せており、Ⅴ段階の力をも身につけつつある生徒も3名おり、さらに生きて働く力にまで高めていきたい。

各分野毎の中学部全体のⅣ段階到達度平均を出してみると、自立化90%、社会化82%、表現化83%、職業化88%の習得率を示した。この結果からも、コミュニケーションと関わりのある社会化、表現化に焦点をあてた指導の取り組みがさらに望まれると考える。



図5 G男の段階別教育内容表のⅣ段階到達度評価

(8) その他の実態

〔目的〕 家庭生活の実態を把握するための「生活リズム調査」、また思春期を迎える中学部の生徒の「性に関する実態」をつかむための表4のような調査を実施した。この結果をコミュニケーションに視点をあてた取り組みにも、家庭と連携を取りながら生かしていくようにする。

〔考察〕 「生活リズム調査」の内容や結果については96頁で述べるが、地域での家族以外との関わりが少ない実態、確実に表れてきている第二次的性徴の発現の様子が分かった。また、この発現について、担任は把握していても親は気づいていない面が多々あり、家庭と連携を取りながら指導していくことが必要である。

表4 性に関する実態調査項目（抜粋）

1	次に挙げる項目であなたのお子さんについてみられるものを選んで、○をつけてください。（いくつでも○をしてください）
	イ 性器の発毛 ロ 脇の発毛 ハ ひげ
	ニ 精通 ホ 自慰行為 ヘ 月経
	ト 声がわり
1-b	ひげがはえている場合は、どうしていますか。 ()
1-c	精通・月経については、どう話していますか。 ()
1-d	自慰行為については、どう対処されていますか。 ()
2	家族との会話の中に、異性の友達の話題がでますか。
	a はい b いいえ
7	ポルノ雑誌などの雑誌やマンガに興味を示しますか。
	a はい b いいえ
8	家庭での性に関して問題と感じている事柄があれば、記入してください。 ()
8-b	問題と感じている事柄に対する家庭での対処の方法を記入してください。 ()